

あれこれ

～ストップ活字ばなれ～



読解力の衰えが指摘されています。生活環境の変化や様々なメディアの発達普及によるもの活字離れが進んでいます。この機会に活字の文化について見直してみたいと思います。

活字離れが進行している現状

新聞 1年間で3大新聞の発行部数が、14～33万部減少
書籍 購買数減少により発行部数縮小、様子をみながら少しずつ部数増刷
町の書店 営業不振で廃業するところも多い
(2017年7月時点で、書店ゼロの自治体は1,896のうち420(22.1%))



タブレットやスマートフォンでの読書はどこでもできて便利ですが、紙面への書き込みや何度も読み返すには、活字の本が適しています。

文字や読書の歴史

文字とは言葉や言語を伝えるために線を使い形作られた記号
絵文字→象形文字→一般的な文字

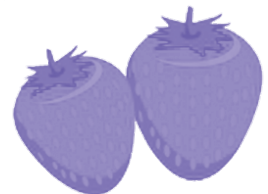
*紀元前3千数百年には、くさび形文字を使っていたようです。
活字は印刷物などに広く使われ、同一の字形で表現されるものをいいます。



古代から読書は趣味というより学問の意味合いを持ち、宮中でも大切にされました。
江戸時代後期には多くの子どもが基本的な学力を身につけました。

栃木県出身あるいは高校時代などを本県で過ごした作家

古くは山本有三、吉屋信子から落合恵子、立松和平など。その後は山田詠美、近年では瀬田深。小山市出身の藤代泉、また本年度直木賞を受賞した門井慶喜などがいます。いずれもメジャーな方々です。他にも地方で脈々と描き続けている作家もいます。時には郷土の作家の方たちの作品に触れてみてはいかがでしょうか。懐かしさと親近感を抱くことうけあいです。



手に取って読んでみませんか。ある書店の社長は「読書は忘れたころに知恵になる」とおっしゃっています。話題になっている本などを手に取りゆっくり読んでみてはいかがでしょうか。今の立ち位置も思考も、まし

